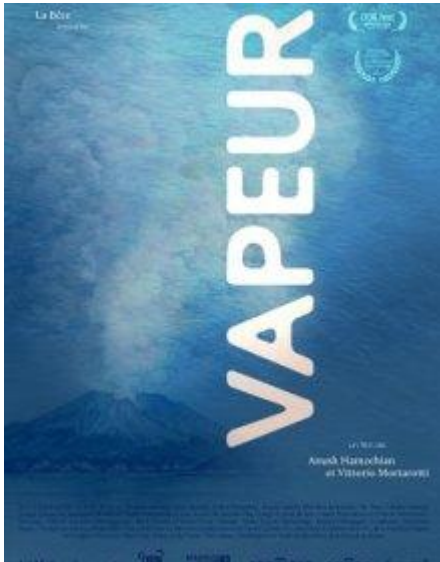


# VAPEUR (ヴァプール)



URL:

<https://www.asburymovies.it/2026/03/10/vapour-2025-anush-hamzehian-vittorio-mortarotti-recensione/>



ステファノ・コッチア (Stefano Coccia) — 2026年3月10日 映画祭、ベルガモ・フィルム・ミーティング2026 アヌシュ・ハムゼヒアン (Anush Hamzehian)、ヴィットリオ・モルタロッチェ (Vittorio Mortarotti) 監督作品  
評価: 7.5点

イタリア人のアヌシュ・ハムゼヒアン (Anush Hamzehian) とヴィットリオ・モルタロッチェ (Vittorio Mortarotti) が日本で制作した『Vapeur (ヴァプール)』<sup>1</sup>は、「蒸発」現象、すなわち蒸発者＝蒸発した人々に捧げられた魅力的なドキュメンタリーである。蒸発者とは、自らの意思で姿をくらし、新たなアイデンティティを構築することで家族・友人・同僚から連絡不能な状態になることを選んだ日本市民たちのことだ。本作は2026年のベルガモ・フィルム・ミーティング (Bergamo Film Meeting) の「クローズアップ・ビューズ (Close-up Views)」部門で上映された。

## 蒸発現象を深く掘り下げる

ベルガモ滞在初日は、ドキュメンタリー映画専門部門「クローズアップ・ビューズ (Close-up Views)」に特に集中した。文字どおり「至近距離で」臨んだと言えよう。サラ・デッロロジオ (時計の間) で数時間のうちに2作品を鑑賞したからだ。第一作、マルティン・コラー (Martin Kollar) 監督の『クロニクル』(Letopis、

<sup>1</sup> Vapeurはフランス語で、英語ではVapour/Vaporであり、水蒸気を意味する。

2025年)は、スロバキアの冬景色と、やや疎外的——時に不穏でさえある——「人新世(アントロポセン)<sup>2</sup>」の断片が組み合わさり、ほぼ解読不能な現在と、先行き不透明な未来の岐路に立つ人類の落ち着かない一瞬を切り取った、方向感覚を失わせる視覚詩である。

それに劣らず強い衝撃を受けたのが、『ヴァプール』(Vapeur、2025年)だ。フランス製作のこのドキュメンタリーは、過去作と同様、イタリア人のアヌシュ・ハムゼヒアン (Anush Hamzehian)(パドヴァ出身、1980年生)とヴィットリオ・モルタルロッチィ (Vittorio Mortarotti)(サヴィリアーノ出身、1982年生)が日本で制作したものであり、両者は日本の複雑な社会的現実に関心を持ってきた。今回彼らが照準を当てたのが、蒸発者現象である。「蒸発した人々」を意味するこの言葉は、毎年何千人もの日本人が「蒸発する」——すなわち、家族・友人・同僚の生活から自発的に姿を消し、より追跡困難な新たなアイデンティティを別の場所で築く——という行為を指す。多くの場合、「レーダーから消える」ことが比較的容易な、より小さなコミュニティへと向かう。これほど根本的な選択へと市民を駆り立てるストレス要因や動機は様々だが、西洋の目には単に恐ろしく、疎外的に映るかもしれないものが、現地では必ずしも同じように受け取られるわけではない。自発的な失踪が、自殺よりも残酷でない代替手段ととらえる人も多いからだ。それどころか、上映後の観客の証言によると、監督たちと交流のある一部の日本人は「イタリア人にはそのような『プランB(代替案=蒸発)』がほとんど思い浮かばない」という事実を、驚いていたという。

## 文化的差異



(ドキュメンタリー『Vapour』の監督、アヌシュ・ハムゼヒアンとヴィットリオ・モルタルロッチィの写真)

要するに、『ヴァプール』は、私たちのライフスタイルから最もかけ離れた日本文化の現象や特質を探求するという現代映画の潮流に見事に合致している。映画的なアプローチは大きく異なるものの、Hikari(宮崎光代 Mitsuyo Miyazaki)監督による、ブレンダン・フレイザー (Brendan Fraser) が類い稀な存在感を放つ甘酸っぱいコメディ『レンタルファミリー(Rental Family)』<sup>3</sup>も、その好例と言えるだろう。

しかし、「蒸発」という比較的古くからある特異な現象がスクリーンに登場するのは、これが初めてではない。ベルガモ映画祭のQ&Aセッションで監督たちが語ったのは、日本の映画界の巨匠、今村昌平(Shōhei

<sup>2</sup> 人新世(アントロポセン)とは、人間活動が地球の地質・生態系に甚大な影響を及ぼし、完新世(約1万1700年前～現在)に代わる新たな地質年代であるとする概念。主に1950年以降の「グレート・アクセラレーション(大加速)」に始まり、気候変動や化石燃料の燃焼などが地層に刻まれている点に特徴がある。

<sup>3</sup> 『レンタル・ファミリー(Rental Family)』は、2026年2月に日本公開された、HIKARI監督、ブレンダン・フレイザー主演の心温まるヒューマンドラマ。東京で孤独に暮らす落ちぶれた俳優が、他人の“家族”を演じるレンタルサービス業を通じて、本当の生きる喜びや人間関係の温かさを再発見する物語。

Imamura)が1967年に制作したドキュメンタリー『人間蒸発』(Ningen Jōhatsu = A Man Vanished)<sup>4</sup>との運命的な出会いについてだった。この作品は、奇妙かつ衝撃的などんでん返し待ち受けることで知られている。何が現実で何がフィクションかを問い直すように作られたこの作品は、婚約者と仕事を残し、ある日忽然と姿を消すことを決めたごく普通の市民を描いている。当時、多くの日本人がそうしていたのだ。

## 日本の島で行われた特異な「調査」



(「Vapeur」、アヌシュ・ハムゼヒアンとヴィットリオ・モルタルロッチェによるドキュメンタリーの画像)

前作『Yonaguni』(2021年)の日本プロモーション・ツアーの最中に、アヌシュ・ハムゼヒアン (Anush Hamzehian) とヴィットリオ・モルタルロッチェ (Vittorio Mortarotti) は、この新しく繊細な作品を進めるにあたって案内役となる人物を探し始めた。こうして出会ったのが、ゴロウ (Goro) である。まるで「メグレ警視 (Maigret)<sup>5</sup>」の物語から抜け出てきたようなたたずまいを持つ中年の探偵で、長年にわたり、家族のため、失踪者の情報収集を専門としてきた人物だ。映像化にうってつけの興味深い案件が舞い込み、彼はすぐに監督たちへ連絡を入れた。

幾何学的なまでに端正で、土地ごとの雰囲気にも忠実なこのドキュメンタリーの中で、私たちはGoroとともに火山島・桜島 (Sakurajima) へと向かう。「蒸発する」ことを選んだある男の最後の痕跡が、この地へと続いているらしく、その男の娘はしばらく前から父の消息をつかめずにいる。しかしここでこの男の行方は、やがて古典的なマクガフィン (MacGuffin)<sup>6</sup> の様相を帯びてくる。つまり関心は次第に、探偵という人物そのものへ、島の住人たちとの出会いへ——中でも印象的なのが、年齢の異なる三人の女性、トシエ (Toshie)・マユミ (Mayumi)・モエ (Moe) で、三人がそろって映し出される場面はギリシャ悲劇のコロス(合

<sup>4</sup> 『人間蒸発』は、1967年の今村昌平監督によるモキュメンタリー映画。モキュメンタリー (Mockumentary) は、フィクションを、あたかもノンフィクションであるかのように演出する映像作品。

<sup>5</sup> メグレ警視 (Jules Maigret) は、ベルギーの作家ジョルジュ・シムノンの推理小説の主人公。パリ警察の主任警部で、鋭い人間観察力と共感力を武器に、犯罪者の心理に寄り添って難事件を解決する、ヨーロッパで最も有名な探偵の一人です。

<sup>6</sup> マクガフィン (英: MacGuffin, McGuffin) とは、小説や映画などのフィクション作品におけるプロット・デバイスの一つであり、登場人物(キャラクター)への動機付けや話を進めるために用いられる作劇上の概念のこと。

唱隊)<sup>7</sup>をどことなく思わせる——蒸発者現象の根底へ、そして火山そのものが体現する静かな脅威へと移ろっていく。一部の地質学者によれば、この火山は近いうちに再び活動を再開し、壊滅的な事態を招く可能性があるという。

ドキュメンタリー作家ヘルツォーク (Werner Herzog)<sup>8</sup> 作品の面影と、アントニオーニ (Michelangelo Antonioni) の60年代映画——つまり、『情事』(L'Avventura)<sup>9</sup>——の雰囲気、人里離れた観光客もまばらなその小島を舞台に絡み合う。物語の停滞が少々目立つきらいはあるものの、同時に、テーマをめぐる考察はどんどん内面的・内省的な深みを増していく。その深まりは、探偵Goroという人物から飛び出した思いがけないパラブル (Parable = 人生訓の寓話)<sup>10</sup> によって雄弁に体現され、そして映画の締めくくりを飾る見事なラストショットの中に、完璧な結晶として刻み込まれている。

## 作品データ

原題: Vapeur

監督: アヌシュ・ハムゼヒアン (Anush Hamzehian)、ヴィットリオ・モルタロッチィ (Vittorio Mortarotti)

製作国/年: フランス/2025年

上映時間: 73分

ジャンル: ドキュメンタリー

<sup>7</sup> ギリシャ悲劇のコロス(合唱隊)は、舞台上で歌や踊りを交え、物語の進行や観客の感情を代弁する10~15人程度の集団。劇の始まりと終わりを告げ、役者と掛け合いを行い、神への祈りや不安を表現する傍観者・解説者として、悲劇の不可欠な役割を担った。

<sup>8</sup> ヴェルナー・ヘルツォーク(1942年~)は、ドイツ出身の映画監督。ニュー・ジャーマン・シネマを牽引し、極限状態の人間の狂気や野生をドキュメンタリータッチで描く映像派として知られる。

<sup>9</sup> 『情事』(原題: L'avventura)は、ミケランジェロ・アントニオーニ監督による1960年の伊仏合作映画。物語の途中で失踪した女性の捜索を通じて、人間の愛の不毛と精神的彷徨を描いたドラマ。主演のモニカ・ヴィッティが魅せる現代的虚無感や、革新的な映像表現が評価され、カンヌ国際映画祭審査員特別賞を受賞した。

<sup>10</sup> パラブル (Parable)は、主に道徳や宗教的な教訓を伝えるための「たとえ話」や「寓話」を意味する。日常生活の出来事を例に用いて、深い教訓や人生の真理を解き明かす物語を指す。特に聖書においてイエス・キリストが語った「たとえ話」がパラブルの典型例。